

Computer Report

Vol. 56 No. 7 7月号 (通巻 742号)

はじめの言葉

■欧州連合 EU からイギリスの離脱が国民投票によって決まった。離脱派はこの結果を「民主主義の勝利だ」とし、この日を「独立記念日だ」とぶち挙げて見せた。多くを考えさせられる事件だった。たとえば、民主主義というものについてである。今回の投票結果は、EU 全体の民意を聞いたものではない。EU の構成国家のひとつイギリスの民意なのだ。EU (グローバルな観点) から見れば、一地方 (リージョナルな立場) の民意でしかない。

■欧州連合 EU への取り組みは、文字通り、20 世紀の歴史的大実験であり、これまでの歴史過程で経験した様々な困難／矛盾を乗り越えたいとする欧州各国の崇高なる野望である。この野望の是非を問うならば、欧州連合全体の各国国民の総数に問うべきである。連合構成の一国 (一地域地方) だけの民意を問うこと自体がおかしい。こんな無理のある国民投票を執行したキャメロン首相、結局は退陣を余儀なくされた。むべなるかな。

■それにしても、今回の大騒ぎを起こしたイギリスの損失は大きい。取り返しのつかない歴史的汚点、大英帝国をして、さらなる凋落の歴史の一ページとなったと言えよう。そもそも、EU 全体を秤に掛けるような投票を自国民だけに問うたことに、イギリス／イギリス国民の驕りが見える。世界の一等国であり、一等国民であるという驕りである。1970 年代、EC への加入を巡って躊躇っていたイギリスの再現である。

■1973 年、イギリス国会において「ビクトリア時代は終わった」という長老議員の演説があり、大揺れしたことを彷彿させる。かつての大英帝国へのノスタルジーが、今なお残っているのだろう。特に高齢世代は、未だ世界に君臨する「七つの海の覇者」の栄光の中にあるのだろう。世界／欧州にあって、自国は一構成国に過ぎないと正しく認識できていない国家／国民であることを、奇しくも、世界に向けて発信してしまった。

■別の観点から指摘されているのが、移民問題である。人道主義、基本的人権など、人類存続の基本中の基本となる概念／権利について、常にリーダーシップを取ってきている国家国民が、実は本音の部分で、最も差別的であり、不平等／不公平な視点を持っているのではないかと疑われる。アメリカのトランプ氏も然りだが、今回の国民投票の結果には、ネイティブイギリス人の本音が出たように思える。

■連日、日本のマスコミも大騒ぎである。通貨の為替レート、株式市場も大揺れである。もともと、金融市場は、根拠らしい根拠もなく変動する (させる?) ものであるから驚かない。むしろ、そのコジツケ根拠説明にウンザリする。改めて、金融市場の危うさ、実態経済に対する虚像本質の脆さを確認させられる。何かというと弄ばれる円相場の危うさを改めて痛感しながら、世界における日本／日本円の扱われ方を考えさせられる。

■イギリス国内には、スコットランドの分離独立というローカルな問題を抱えている。グローバルな最適化行動に賛同せず、リージョナルな国民意識を重視し、ローカルな意見をないがしろにする。今のイギリスの姿である。具体的な EU 離脱は 2 年後となるようだが、グローバル、リージョナル、ローカルないずれの対応にも最適化策を見いだせない姿が見て取れる。他山の石としたい。今後の日本の対応こそが注目される。(藤見)